

## 「can/may構文」における捉え方と動機づけ

著者	長友 俊一郎
雑誌名	研究論集
巻	83
ページ	113-129
発行年	2006-03
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006261">http://doi.org/10.18956/00006261</a>

## 「can/may 構文」における捉え方と動機づけ

長 友 俊一郎

### 0. はじめに

「can/may 構文」は、話し手が聞き手に対して、ある事象の実現を促す場合に用いられることがある (cf. Quirk et al. 1985: 222; Palmer 1990<sup>2</sup>: 86; Huddleston and Pullum 2002: 183, etc.)。Tregidgo (1982: 90) は、may の意味構造を(1)のように提示した。

(1) a may b = X PERMIT Y - Y CAUSE - ab

(1)は、「XがYに対して「aがbする」という命題内容を引き起こすことを許可する」というものである。たとえば、

(2) You *may* call further witnesses if you so desire. (Tregidgo 1982: 84)

の場合、Xは「話し手」であり、Yは「聞き手」と解釈することができる (cf. Tregidgo 1982: 84)。

can 構文においても、同様の分析が可能である。たとえば、(3)においても、XとYは、それぞれ、「話し手」と「聞き手」に相当すると解釈することができる。

(3) You *can* have a piece of cake after you've eaten your vegetables! (COBUILD<sup>4</sup>)

本稿では、(2)と(3)のような「許可」／「義務」を表す can/may 構文を、話し手の「視点」の置かれる位置と「動機づけ」として想起される状況のタイプの観点から比較してみたい。また、両構文が想起する認知構造についても触れてみたい。

### 1. 基本概念

#### 1.1 視点

「視点」(viewpoint/vantage point) の位置は、多くの表現の意味に関して中核的な役割を果たす (Langacker 1997: 57)。本稿では、視点の概念を以下の定義によって捉えておきたい。

(4) 言語行為において、話し手 (あるいは聞き手) があるできごとを描写しようとする

きに話し手（あるいは聞き手）が占めている空間的 (special)、時間的 (temporal)、心理的 (psychological) な位置。(澤田 1993: 303ff.)

話し手の視点は、「ダイクシス」(deixis) と深く関わっている (澤田 1993: 304; Langacker 2002<sup>2</sup>: 315-316)。Fillmore (1966) は、ダイクシスを以下のように定義している (cf. Levinson 1983: 54)。

Deixis is the name given to those aspects of language whose interpretation is relative to the occasion of utterance: to the time of utterance, and to times before and after the time of utterance; to the location of the speaker at the time of utterance; and to the identity of the speaker and the intended audience. (Fillmore 1966: 220)

基本的に、視点は話し手の側に置かれる (澤田 1993: 304; Langacker 1997: 57)。この場合、話し手が「描写の座標の中心点」(deictic center) に位置し、できごとを「捉え」(construe) (cf. Langacker 1997: 57, etc.)、そのできごとの「ダイクティックな描写」(deictic description) を行う (澤田 1993: 304)。次の例を考えてみよう。

(5) The squirrel is behind that tree. (Langacker 1997: 57)

この場合、話し手が描写の座標の中心点に位置し、「リスが木の後ろにいる」というできごとを捉え、ダイクティックな描写を行っているとは分析される。したがって、以下のように形式化することが可能である。ここでの、S, TR, SQ は、それぞれ、「話し手」、「木」、「リス」に対応する。また、角括弧はできごとを表し、話し手からの矢印は話し手がそれを捉えていることを表している。

(6) S → [TR — SQ] (Langacker 1997: 57)

視点は移動することがある (Fillmore 1966: 222ff.; Lyons 1977: 579; 澤田 1993: 305; Langacker 1987: 123)。この場合、あるできごとは、話し手以外の目を通して捉えられる／語られることになる。次の例を見られたい。

(7) Jill can't see the squirrel, since it's behind the tree. (Langacker 1997: 57)

(7)は、Jill ができごとを捉えている状況を話し手が捉えている／報告していると分析することができ、これを形式化すると、以下のようなものになる。

(8) S → [J → [TR — SQ]] (Langacker 1997: 57)

本稿では、話し手の視点の位置／捉え方が言語表現に反映されるという見地から、can/may 構文における視点の位置／捉え方を比較してみたい。

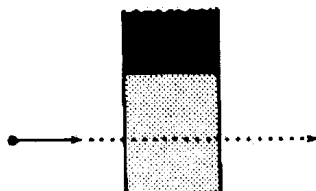
## 1.2 英語法助動詞と力のダイナミクス

Talmy (1988; 2000) は、英語法助動詞は、「力のダイナミクス」(force dynamics) という「認知システム」(cognitive systems) 内の「構造的特徴」(structural properties) に関係する

としている (cf. Johnson 1987; Sweetser 1990; Langacker 1991; 1998; 2003; 2004, etc.). 力のダイナミクスとは、力の行使、行使された力への抵抗、力に対する障害物、障害物の除去が織り成す関係である (Talmy 2000: 409)。

Sweetser (1990) は、力のダイナミクスの概念を援用し、英語法助動詞の分析を提示した。Sweetser は、「現実領域」(content domain)、「認識領域」(epistemic domain)、「言語行為領域」(speech act domain) という領域を提示し、英語法助動詞の多義性を、領域から領域への「メタファー写像」(metaphorical mapping) によって捉えた。たとえば、may は、以下のように分析される。まず、may は、(9)の「イメージスキーマ的な構造」(image-schematic structure) と称される力のダイナミクスに関連する意味構造の抽象的側面／位相的側面を持つとされる。ここでのイメージスキーマとは、ヒトが経験により抽出する抽象的な理解／知識の鋳型と定義されるものである。

(9)



(Sweetser 1990: 60)

(9)は、「事象の実現を妨げるものはない」という基本的意味を表わすものである。(9)が、(i)現実領域に適用された場合には、may は「あなたが事象を実現することに妨げるものはない」といった意味を表わし、(ii)認識領域に適用された場合には、「そのように結論することに妨げるものはない」といった意味を表わし、(iii)言語行為領域に適用された場合には、「あなたがそう主張することに妨げるものはない」といった意味を表わすとされる。次の例を考えてみよう。(10a)は、may のイメージスキーマが現実領域に適用された場合である。(10b)と(10c)は、それぞれ、(9)が認識領域と言語行為領域に適用されたものである (Sweetser 1990: 61, 70)。

- (10) a. John *may* go.  
 b. John *may* be there.  
 c. He *may* be professor, but he sure is dumb.

(10a)-(10c)は、それぞれ、(11a)-(11c)のように分析されている (Sweetser 1990: 61, 70)。

- (11) a. ジョンは(私、あるいは、他の人の)権力によって行くことを妨げられてはいない。  
 b. 私は私の前提によって彼がそこにいると結論づけることを妨げられてはいない。  
 c. 私は彼が大学教授であるというあなたの言明を(互いの)会話世界から妨げられることはない。

本稿では、(10a)の「権力」のような、力を行使し言語化されていない「実体」(entity) と

「ジョン」のような、おおよそ主語として言語化される実体を、それぞれ、「力の源」(the source of the potency) と「力の標的」(the target of the potency) と呼ぶこととしたい (cf. Langacker 1991; 1998; 2003, etc.)。以下、can 構文と may 構文では、力の源からの力の強さに関して類似点と相違点が看取されることを論じ、その力の違いがそれぞれの構文と共起する「動機づけ」の状況の違いに反映されることを論じてみたい。

### 1.3 動機づけ

澤田 (1999: 63) は、力の源が力の標的の自由意志を奪い、緊張関係を生みだしかねない法助動詞構文では、理由、目的、条件といった、「動機づけ」の関与があることを論じた (cf. Sweetser 1990: 31)。動機づけは、顕在的に表現される場合と、潜在的に含意される場合とがある (澤田 1999: 61-63)。次の例を考えてみよう。

(12) “I’m bored,” Anna said.

“Can’t we play a game?”

“It’s far too hot to run about,” Ruth told her. “You *may* pick daisies and I’ll show you how to make a daisy chain.” (E. Rhodes, *Ruth Appleby*) [BNC] (斜体／下線筆者)

(13) “I don’t know how to thank you for your kindness. It’s ... well, to put it poetically, it’s been like finding an oasis in a desert.”

“Well, lad, if that’s how you think, you *may* come and drink any time you feel thirsty.”

(C. Cookson, *My Beloved Son*) [BNC] (斜体筆者)

(12)では、動機づけが下線部に顕在的に言語化されている。ここでは、「そうすれば、花輪の作り方を教えてあげる」という動機づけをもとに、話し手が聞き手に対してヒナギクを摘むように力を行使していると分析することができる。(13)は、潜在的な動機づけが看取される事例である。ここでは、「そうすれば、あなたは幸せな気分になる」といった潜在的な動機づけが看取される。

以下、can 構文と may 構文では、動機づけとして想起される状況の違いが見られることを指摘したい。また、この違いは、それぞれの構文が促す認知構造に反映されることにも触れてみたい。

## 2. 視点の位置

### 2.1 視点と主観性

まず、「モダリティ」と視点の位置に関して、(14)を想定しておきたい。ここでの「主観的」とは、「話し手と関係していること」／「話し手の関与があること」を意味し、「客観的」とは、

「(命題/事象の) 内容に関係していること」／「話し手の関与がないこと」を意味している (Halliday 1970: 342; Lyons 1977: 452)。また、「モダリティ」とは、概略、「状況」(situation) や「事態」(state of affairs) のあり方、もしくは(義務的かどうか/確実か不確実かといった)話し手の捉え方のことである (cf. 澤田 1999; Palmer 2001<sup>2</sup>; 2003)。

(14) 法助動詞が主観的モダリティを表出する場合には、視点は力の源の側に置かれ、客観的モダリティを表出する場合には、視点は力の標的の側に置かれる。(cf. 澤田 1999; 岡本 2005)

法助動詞によって主観的なモダリティが表出される場合、力の源は話し手となると考えることができる。(12)や(13)から示唆されるように、法助動詞構文において主観的モダリティが表出される場合は、その法助動詞構文は(直接的な)「指令型」の発話 (directives) に属し、「話し手が聞き手に何かをさせる」(Searle 1979:13) という性質を持つものとして特徴づけることが可能であるからである。また、このタイプの発話は「遂行的」(performative) (Austin 1975<sup>2</sup>; Searle 1969) であるため、力は発話時に一時的に課されるものとなる。したがって、力の源の側に視点が置かれる法助動詞構文の特徴は、以下のように要約することができる。

(15) 力の源の側に視点が置かれる法助動詞構文の特徴：

「話し手」が力の源となり、力は一時的なものとなる。

一方、法助動詞によって客観的なモダリティが表出される場合、(16)のように、話し手が現実で既に成立している(「法律」／「規則」などの)力の報告を行うことによって、間接的に聞き手に行為の実現を促すものとなる。

(16) “Shoo,” said Mrs. Beavis to her girls, and the passage emptied.

“One *can* always forgive the young,” said Marcelle. (M. J. Staples, *Sergeant Joe*) [BNC]  
(斜体筆者)

したがって、力の標的の側に視点が置かれる法助動詞構文の特徴は、以下の通りである。

(17) 力の標的の側に視点が置かれる法助動詞構文の特徴：

力が一般的/習慣的なものとなる。

## 2.2 can/may 構文と視点

### 2.2.1 can 構文と視点

まず、次の例を考えてみよう。

(18) “I’ll show you the room, which if you like it you *can* rent with pleasure. Could I’ ave yer name, love?”

“I am Mademoiselle Marcelle Fayette of Dieppe. Please, yes, I should like to see the room.” (M. J. Staples, *Sergeant Joe*) [BNC] (斜体筆者)

- (19) “In some kind of trouble, are you? But you’re a good kid really – you *can* come and stay with me and the wife, if you don’t mind babies that is ... Oh, you’ll baby-sit? Great, we’ll give you one pound an hour.” (A. Leonard, *Gate-Crashing the Dream Party*) [BNC] (斜体筆者)

(18)と(19)の *can* 構文は、力の源の側に視点が置かれるものとして特徴づけることができる。第一に、これらの事例においては、話し手が聞き手に力を行使していると捉えることができる。このことは、(18)と(19)の *can* 構文が、以下のように、話し手の力の行使を明示的に表す表現とパラフレーズ関係にあることから示唆される。

- (20) I give you permission to rent with pleasure.

- (21) I invite you to come and stay with me and the wife.

同様のことは、(18)と(19)において、主観的な「文副詞」*really* を挿入することができることから示唆される (cf. Jackendoff 1972: 75; Radford 1988: 74)。

- (22) You really *can* rent with pleasure.

- (23) You really *can* come and stay with me and the wife.

また、(18)においては、(24)の言い換えから示唆されるように、*with pleasure* という表現の「喜び」は話し手のものであり、意味的に *rent* とは結びつかず、許可を与えることに結びつくことから、話し手が力の行使に関連していることが裏づけられる (cf. Palmer 1990<sup>2</sup>: 71; Huddleston and Pullum 2002: 183)。

- (24) It is my pleasure to give you permission to rent.

第二に、(18)と(19)においては、力の行使は発話時における一時的なものであり、発話以前に既に成立している一般的／習慣的な力は表されていない。このことは、まず、(18)と(19)の *can* 構文は、以下のような力の既存性を含意する表現に言い換えることができないことから示唆される。

- (25) \* You already have a right to rent with pleasure.

- (26) \* You already have a right to come and stay with me and the wife.

また、力の一般性／習慣性を含意する、*always* といった文副詞を以下のように挿入することはできない。

- (27) \* You always *can* rent with pleasure.

- (28) \* You always *can* come and stay with me and the wife.

さらに、一般的な力の関与があることを示す、“one”は(18)と(19)において主語として (=力の標的として) 用いることができない。

- (29) \* One *can* rent with pleasure.

- (30) \* One *can* come and stay with me and the wife.

最後に、(18)と(19)の発話は、話し手の関与が無いことを含意する “It is possible for....” で書き換えることができない (cf. Coates 1983: 95)。

(31) \* It is possible for you to rent.

(32) \* It is possible for you to come and stay with me and the wife.

一方で、can 構文には、力の標的の側に視点の置かれるものも観察される。次の例を考えてみよう。

(33) (=16)) “Shoo,” said Mrs. Beavis to her girls, and the passage emptied.

“One *can* always forgive the young,” said Marcelle. (M. J. Staples, *Sergeant Joe*) [BNC] (斜体筆者)

ここでの can 構文が力の標的の側に視点が置かれるものであることは、第一に、力の源が話し手と関連しないことから示唆される。まず、(33)の can 構文は、話し手の力の行使を明示する(34)によっては言い換えることができない。

(34) \* I {order/advise} you to forgive the young.

また、(33)に主観的な really を以下のように挿入することはできない。

(35) \* One really *can* always forgive the young.

第二に、(33)の can 構文には、一般的／習慣的な力の関与がある。これは、(33)が、“This is what your present duties consist of.”／“as far as I know” といった、一般的／習慣的な力を含意する表現と共起可能であることから示唆される。

(36) One *can* always forgive the young. (This is what your present duties consist of.)

(37) (As far as I know,) one *can* always forgive the young.

最後に、(33)での always は、力の一般性／恒常性を表すものである。この副詞を、文副詞しか生じ得ない位置へ移動させても、(33)との根本的な伝達意図の違いを生じさせるものとはならない。

(38) One always *can* forgive the young.

以上から、can 構文と話し手の占める視点の位置に関して、以下のように捉えておきたい。

(39) can 構文は、視点が力の源の側に置かれる場合と、力の標的の側に置かれる場合とに分かれる。

したがって、

(40) You *can* park here. (Thomson and Martinet 1986<sup>4</sup>: 129)

は、曖昧であり、「ここに駐車してもいい。」という解釈にも、「ここに駐車することが可能である。」という解釈にもなり得る (Thomson and Martinet 1986<sup>4</sup>: 129; cf. Quirk et al. 1985: 222, 224, etc.)。前者の解釈は、視点が力の源の側に置かれた場合のものであり、後者の解釈は、視点が力の標的の側に置かれた場合のものであると捉えることができる。



### 2.2.2 may 構文と視点

まず、次の例を考えてみよう。

(41) “The others may leave.”

The designer clapped his hands and the other girls exited the room.

Caroline wanted to go, too, but her feet felt rooted to the platform.

Nicolo looked at the designer.

“You *may* leave, as well.” (S. Marton, *Roman Spring*) [BNC] (斜体筆者)

(42) “But I suppose you’re thinking you’d like to kiss it? You *may* if you want to.” (T.

Hardy and C. West, *Far From the Madding Crowd*) [BNC] (斜体筆者)

(41)と(42)の may 構文は、話し手の視点が力の源の側に置かれるものとして特徴づけることができる。第一に、これらの発話において、力の源が話し手となっていると解釈することが可能である。このことは、(41)と(42)の斜字体を含む発話は、それぞれ、話し手が力を行使していることを明示的に表す、(43)と(44)とパラフレーズ関係にあることから示唆される。

(43) I allow you to leave, as well.

(44) I allow you to kiss it.

第二に、(41)と(42)の発話に関与する力は、発話時における一時的なものとなっている。このことは、(i)力の既存性を含意する “You have a right to....” を用いて書き換えることができないこと ((45), (46)参照)、(ii)力の一般性／習慣性を含意する “as far as I know” との共起が不自然であること ((47), (48)参照)、(iii)力の一般性／習慣性を含意する文副詞の挿入が容認されないこと ((49), (50)参照) などから示唆される。

(45) \* You have a right to leave, as well.

(46) \* You have a right to kiss it.

(47) ??As far as I know, you *may* leave as well.

(48) ??As far as I know, you *may* if you want to.

(49) \* You always *may* leave, as well.

(50) \* You always *may* if you want to.

may 構文では、通常、力の標的の側に視点が置かれることはないと思われる。<sup>2)</sup> たとえば、

(51) You *may* park here. (Thomson and Martinet 1986<sup>4</sup>: 129)

の言い換えは、話し手の力の行使を明示的に表現する(52)であり、習慣的な力の関与を表す(53)にはならない (cf. Thomson and Martinet 1986<sup>4</sup>: 129; Quirk et al. 1985: 222, etc.).

(52) I give you permission to park.

(53) \* It is possible for you to park.

また、may を含む発話には、一般的に、always といった力の一般性／習慣性を含意する副

詞を以下のように挿入することはできない。

(54) ?You always *may* park here.

以上から、may 構文を視点の位置の観点から次のように捉えておきたい。

(55) may 構文では、視点は力の源の側に置かれる傾向にある。

### 3. 動機づけ

#### 3.0 はじめに

本節では、can/may 構文と共起する動機づけの特徴を提示してみたい。以下、まず、力の源の側に視点が置かれる際の、can/may (構文) が表出する力の強さの類似点/相違点について考察することからはじめる。次に、力の強さと想起される動機づけとの関係について論じ、can 構文と may 構文で想起される動機づけの類似点/相違点を例証する。

#### 3.1 can/may の力の強さの違いと動機づけ

はじめに、話し手が聞き手に力を行使し、ある事象の実現を促す際の力の強さに関して、(56)を想定しておきたい。

(56) 発話時において、話し手が聞き手は事象を実行する意図を持ちあわせていない（可能性がある）と捉える場合には、話し手が聞き手へ行使する力は強いものになる。

まず、次の事例を考えてみよう。

(57) “Don’t ... move ... the arrow,” I said with terrible urgency.

“It would hurt less out,” he said obstinately.

...

“Don’t touch it, Perkin. It’s hurting him dreadfully.”

...

“You *must* leave it. You’ll kill him. Darling, you *must* leave it alone.” (D. Francis, *Longshot*) [BNC] (斜体筆者)

ここでのコンテキストでは、*must* 構文の聞き手は、矢を引き抜こうとしており、話し手は聞き手が事象の実現の意志を（発話時において）持ち合わせていないと捉えている (cf. R. Lakoff 1972: 914)。 (56)を想定すれば、このようなコンテキストで用いられる法助動詞の表出する力は強いものとなることになるが、実際にここでは *must* が用いられている。*must* が強い力を表出する形式であることは、*must* 構文においては（未来の）聞き手の事象の実現が常に前提とされることから示唆される。

(58) \* You *must* leave it, but I know you won’t.

力の源の側に視点が置かれる can 構文の中には、このタイプのコンテキストで用いることができるものがある。(57)では、must 構文の代わりに、(強さは must の場合より弱まるが) can 構文を用いることも可能である。

(59) You *can* leave it.

以下の can を含む発話を考えてみよう。

(60) “There’s nothing I can do to prolong the girl’s stay here, even if I wanted to.”

…

“But you *can* try. Please say you’ll try.”

Her longing for her daughter outweighed all else and she began to sob. (P. Pope, *The Rich Pass By*) [BNC] (斜体筆者)

ここでの can を含む発話では、「彼女を説得することを試みること」が要請されているが、その事象に対して、聞き手は、「私にできることは何もない」という否定的な態度を表明している。したがって、(56)から、(60)の can は強い力を表出するものであると予測されるが、実際に、(60)の can 構文は、強い力を表出する must 構文に置き換えることが可能である。

(61) But you *must* try.

一方で、may 構文は、聞き手が要請される事象の実現を否定的に捉えないコンテキストにおいて用いられる傾向にある (R. Lakoff 1972: 914; Talmy 1988: 78ff.; 2000: 441ff.).

(62) (= (12)) “I’m bored,” Anna said.

“Can’t we play a game?”

“It’s far too hot to run about,” Ruth told her.

“You *may* pick daisies and I’ll show you how to make a daisy chain.” (E.

Rhodes, *Ruth Appleby*) [BNC] (斜体筆者)

ここでは、話し手は、退屈で何かをしたいと思っている聞き手に対して、ヒナギクを摘むことを促している。(56)から、このようなコンテキストで用いられる法助動詞は、強い力を表出するものではないことが予測される。実際に、ここでの may 構文の代わりに must 構文を用いることはできない。

(63) \* You *must* pick daisies and I’ll show you how to make a daisy chain.

may が、一般的に、このようなコンテキストにおいてのみ用いられることは、前出の(57)や(60)の法助動詞は、may には置き換えることができないことから示唆される。

(64) \* You *may* leave it.

(65) \* But you *may* try.

最後に、力の源の側に視点が置かれる can 構文は、弱い力を表出する場合もあるようである。can は、(62)のようなコンテキストにおいて用いられることもある。(62)の may を can に

置き換えても、根本的な伝達意図に違いを生じさせるものではない。

(66) You *can* pick daisies and I'll show you how to make a daisy chain.

次の例を考えてみよう。

(67) “May we go, sir?”

“Yes, you *can* leave the court now.”

“Thank you.” [BNC]

(67)の can は、次のように強い力を表出する must には置き換えることはできないが、may には置き換えることができる。

(68) You {*\*must/may*} leave the court now.

以上から、can/may の力の強さに関して、次のようにまとめておきたい。

(69) 力の源の側に視点が置かれる can/may 構文に関して、can は強い力を表出する場合と弱い力を表出する場合とに分かれる。一方、may は強い力は表出しない。

強い力を表出する法助動詞（構文）は、本質的に、「さもないと～」といった「脅し」のニュアンスのある、聞き手にとって好ましくない状況（＝動機づけ）と共起するのは自然である。また、強い力を表出する法助動詞（構文）においては、聞き手にとって好ましい状況も動機づけとして想起され得ると考えられる。なぜなら、聞き手の利益となる事象の実現を、聞き手に対して強く促すことは自然であるからである（cf. R. Lakoff 1972: 912-913; Palmer 1990<sup>2</sup>: 73）。一方、強い力を表出しない法助動詞（構文）が、聞き手にとって好ましくない状況と共起するのは不自然であると考えられる。なぜなら、相手に事象の実現を強く要請をしないにも関わらず、「脅し」のニュアンスを伝達することは不自然であるからである。

### 3.2 can 構文と動機づけ

ここでは、力の源の側に視点が置かれる場合の can 構文と共起する動機づけの特徴について考えてみたい。上記のように、can は、強い力と弱い力を表出する場合がある。したがって、前出の論議から聞き手にとって好ましい状況／聞き手にとって好ましくない状況が動機づけとして想起されることが予測される。

以下の事例は、聞き手にとって好ましい状況が動機づけとして想起されているものである。

(70) “Give me what you owe me up until today.”

Mrs. Mantini glowered, her eyes roasting.

“I certainly won't. You *can* come in on Saturday and I'll give it you then.”

“No,” said Rachaela. “I'd like it now.” (T. Lee, *Dark Dance*) [BNC] (斜体／下線筆者)

(70)では、「私があなたに借りていたもの返すことができる」という聞き手にとって好ましい状況を動機づけとして、話し手は「聞き手に土曜日に来ることを促している。

以下の事例は、強い力を表出する can を含み、聞き手にとって好ましくない状況が動機づけとして想起されているものである。

(71) “I thought you were supposed to be going out?”

“No, I cancelled it earlier today.”

“What a mistake, but maybe you *can* put it right, otherwise you’ll have to eat alone,” she finished sweetly. (K. McCallum, *Driven By Love*) [BNC] (斜体/下線筆者)

(71)では、「さもないと、一人で食事をするようになってしまう」という聞き手にとって好ましくない状況が動機づけとして述べられている。

以上から、力の源の側に視点が置かれる can 構文と共起する動機づけに関して、次のように捉えておきたい。

(72) 力の源の側に視点が置かれる can 構文では、聞き手にとって好ましい状況/聞き手にとって好ましくない状況が動機づけとして想起される。

### 3.3 may 構文と動機づけ

前出のように、may は、強い力を表出しない。したがって、may 構文では、聞き手にとって好ましくない状況は、通常、動機づけとして想起されないことが予測される。以下は、聞き手にとって好ましい状況が動機づけとして想起されている事例である。

(73) (=12) “I’m bored,” Anna said.

“Can’t we play a game?”

“It’s far too hot to run about,” Ruth told her.

“You *may* pick daisies and I’ll show you how to make a daisy chain.” (E. Rhodes, *Ruth Appleby*) [BNC] (斜体/下線筆者)

(74) “I don’t know how to thank you for your kindness. It’s ... well, to put it poetically, it’s been like finding an oasis in a desert.”

“Well, lad, if that’s how you think, you *may* come and drink any time you feel thirsty.”

(C. Cookson, *My Beloved Son*) [BNC] (斜体筆者)

(73)では、「そうすれば、花輪の作り方を教えてあげる」という、聞き手にとって好ましい状況が動機づけとして想起されている。(74)でも、「そうすれば、あなたは幸せな気分になる」といった潜在的な同様の動機づけが看取される。

may 構文では、聞き手にとって好ましくない状況は動機づけとして想起されない傾向にあることは、(73)の動機づけを聞き手にとって好ましくない状況に変えることができないことから示唆される。

(75) \* You *may* pick daisies, otherwise I won’t show you how to make a daisy chain.

また、手元の BNC コーパス/BOE コーパスにおいて、“you may...” と聞き手にとって好ましくない状況を導入する典型的な表現である「非対称的」(asymmetric) 用法 (cf. R. Lakoff 1971: 127; Sweetser 1990: 99) の or/otherwise が共起する事例は一例も見つからない。

以上から、may 構文と動機づけとの関係について、次のように捉えておきたい。

(76) may 構文では、聞き手にとって好ましい状況が動機づけとして想起され、聞き手にとって好ましくない状況は動機づけとして想起されない傾向にある。

#### 4. 終わりに

本稿の主な論議は、以下の通りである。

(77) a. can 構文は、視点が力の源の側に置かれる場合と力の標的の側に置かれる場合とに分かれるのに対して、may 構文における視点は、力の源の側に置かれる傾向にある。

b. can 構文では、動機づけとして、聞き手にとって好ましい状況/聞き手にとって好ましくない状況が想起される。一方で、may 構文では、聞き手にとって好ましくない状況は動機づけとして想起されない傾向にある。

最後に、これまでの論議から示唆される can/may 構文によって促される認知構造に関して考えてみたい。まず、Fauconnier (1994<sup>2</sup>) は、(典型的には言語によって媒介された) ある思考に対して構築される領域とされる、「メンタルスペース」(mental spaces) と呼ばれる概念を導入した。

... when we engage in any form of thought, typically mediated by language (for example, conversation, poetry, reading, story telling), domains are set up, structured, and connected. The process is local: A multitude of such domains—mental spaces—are constructed for any stretch of thought, and language (grammar and lexicon) is a powerful means (but not the only one) of specifying or retrieving key aspect of this cognitive construction. (Fauconnier 1994<sup>2</sup>: xxxvii)

次の例を考えてみよう。

(78) You *must* stop smoking in here. (Lampert and Lampert 2000: 247)

Lampert and Lampert (2000: 247) は、上記のメンタルスペースの概念を用いて、must を含む (78) の文には、2つのメンタルスペースの関与があると以下のように論じている。

... in that 「Reality/Base」 Space an element **a** (you) located which is associated with property ‘smokes’ (this element is identifiable as the Agonist of TALMY’s Force Dynamics configuration); and, finally, this element’s counterpart **a’** in the focus space M

associates the property ‘stop smoking’ ... M turns out to be the focus space of this particular Mental Space constellation, with *must* evoking the relevant Force Schema, that is, Compulsion. (Lampert and Lampert 2000: 247)

本稿では、(i)力の源の側に視点が置かれる can 構文では、現実において、聞き手は事象の実現に対して抵抗を示す／抵抗を示さない実体であること、(ii)力の標的の側に視点が置かれる can 構文では、現存の力が含意されること、(iii)may 構文では、現実において、聞き手は事象の実現に対して抵抗を示さない人物として捉えられる実体であることを論じた。したがって、メンタルスペースの概念を援用すると、「話し手の現実」(speaker’s reality) を表示する「現実スペース」(reality space) (Fauconnier 1994<sup>2</sup>: 17) に関して以下のような記述が可能になる。

- (79) a. 力の源の側に視点が置かれる can 構文では、現実スペースにおいて、聞き手は事象の実現に対して抵抗を示さない／抵抗を示す人物として前景化される。  
b. 力の標的の側に視点が置かれる can 構文では、現実スペースにおいて、力のダイナミクス状況が成立する。  
c. may 構文では、現実スペースにおいて、聞き手は事象の実現に対して抵抗を示さない人物として前景化されている。

また、新しく設定されるメンタルスペースに関して、(77b)から、以下のような記述も可能となる。

- (80) a. can 構文では、聞き手にとって好ましい状況／聞き手にとって好ましくない状況を表示するメンタルスペースが想起される。  
b. may 構文では、聞き手にとって好ましくない状況を表示するメンタルスペースは想起されない傾向にある。

次に、本稿で論じた力の源の側に視点が置かれる法助動詞構文における can/may の表出する力の強さに関して、(81)を考えてみよう。(81)は容認される文である。前述のように、can は may よりも強い力を表出することがある。しかし、その場合においても表出される力は、事象の実現を前提とするほど強いものとはならない。

(81) You {*can/may*} do as he says, but you won’t. (視点=力の源の側)

つまり、力の源の側に視点が置かれる can 構文と may 構文では、話し手が聞き手の事象の不履行の可能性を考慮に入れているのである。これは、(82)のメンタルスペースの設定に反映されると考えることができる。

(82) 力の源の側に視点が置かれる can 構文と may 構文においては、聞き手によって事象が実現されない場合の状況を表示するメンタルスペースが設定される。

「メンタルスペース理論」(i.e. Fauconnier 1994<sup>2</sup>) では、新しいメンタルスペースを構築する言語形式を、「スペース導入表現」(space builder) と称している。たとえば、前置詞句 (e.g.

in Len's picture)、副詞 (e.g. probably)、命題結合子 (e.g. either ... or ...)、主語と動詞の結合 (Mary hopes ...) がそれに相当する。“in Len' picture” と “probably” のようなスペース導入表現は、1つのメンタルスペースを導入するとされている。たとえば、前者の場合、Len の絵での状況が成立するメンタルスペースが設定されることになる。“either ... or ...” と “Mary hopes” は、2つのメンタルスペースを構築する（可能性がある）とされる。たとえば、前者は、「2つのスペースの導入表現」(double space builder) (Fauconnier 1994<sup>2</sup>: 92) と称され、「可能な」状況が成立する2つの「可能スペース」(possibility space) を設定するものとされている。

上記のように、can/may は、メンタルスペース導入表現として特徴づけることが可能である。そして、たとえば、力の源の側に視点が置かれる can 構文は、4つのメンタルスペースを設定し得る構文と看做すことが可能である (i.e. (i)can の喚起するイメージスキーマによって組織化され、聞き手が事象を実現した状況を表示するスペース、(ii)聞き手が事象を行わなかった状況を表示するスペース、(iii)聞き手にとって好ましい状況を表示するスペース、(iv)聞き手にとって好ましくない状況を表示するスペース)。本稿での can/may 構文に対する捉え方が妥当なものであれば、can/may は、「メンタルスペース理論」の枠組みで論じられた言語分析においてあまり指摘されることのなかった、3つ以上のメンタルスペースを設定するメンタルスペース導入表現として特徴づけることができる。

## 注

- 1) Talmy (1988; 2000) の術語では、力の源と力の標的は、それぞれ、「拮抗子」(antagonist) と「主動子」(agonist) と呼ばれている。
- 2) 以下のように、書き言葉では力の標的の側に視点が置かれるものも観察される (cf. Palmer 1990<sup>2</sup>: 110; Facchinetti 2003: 310)。

(i) Readers may not (except by special permission) have more than 12 volumes (50 map sheets) in reserve at a time, and should return each book they have in use as soon as it is finished with. (Facchinetti 2003: 310)

## 引用文献

- Austin, J. L. 1962. 1975<sup>2</sup>. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press.
- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London. Croom Helm.
- Facchinetti, R. 2003. “May in Contemporary English.” In Facchinetti, R et al. (ed.), *Modality in Contempera-*



- ry English. Berlin: Mouton de Gruyter. 301-327.
- Fauconnier, G. 1994<sup>2</sup>. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, C. J. 1966. "Deictic Categories in the Semantics of 'Come'." *Foundations of Language* 2: 219-227.
- Halliday, M. A. K. 1970. "Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English." *Foundations of Language* 6: 322-361.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge: MIT Press.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, R. 1971. "If's, And's, and But's about Conjunction." In Fillmore, C. J. and D. T. Langendoen. (eds.), *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Rinehart, and Winston. 114-149.
- Lakoff, R. 1972. "Language in Context." *Language* 48: 907-927.
- Lampert, G. and M. Lampert. 2000. *The Conceptual Structure(s) of Modality: Essence and Ideologies*. Frankfurt an Main: Peter Lang.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Vol. I). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Vol. II). *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1997. "Consciousness and Subjectivity." In Stamenov, M. I. (ed.), *Language Structure, Discourse, and the Access to Consciousness*. Philadelphia: John Benjamins. 49-75.
- Langacker, R. W. 1998. "On Subjectification and Grammaticization." In Koenig, L. (ed.), *Discourse and Cognition*. Stanford: CSLI Publications. 71-89.
- Langacker, R. W. 2002<sup>2</sup>. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. 2003. "Extreme Subjectification: English Tense and Modals." In. Cuyckens, H. et al. (eds.), *Motivation in Language: Studies in Honor of Gunter Radden*. Philadelphia: John Benjamins. 3-26.
- Langacker, R. W. 2004. "Aspects of the Grammar of Finite Clauses." In Achard, M and S. Kemmer (eds.), *Language, Culture, and Mind*. Stanford: CSLI. 535-577.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1977. *Semantics 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡本芳和 2005『話法とモダリティ』東京：リーベル出版。
- Palmer, R. F. 1986. 2001<sup>2</sup>. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, R. F. 1990<sup>2</sup>. *Modality and the English Modals*. London: Longman.

- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 澤田治美 1993 『視点と主観性』 東京：ひつじ書房.
- 澤田治美 1999 「語用論と心的態度の接点」『月刊言語』28-6, 58-63.
- Searle, J. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: University of Cambridge Press.
- Talmy, L. 1988. "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science* 12: 49-100.
- Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. (Vol. I). *Concept Structuring Systems*. Cambridge: MIT Press.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1986<sup>4</sup>. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Tregidgo, P. S. 1982. "MUST and MAY: Demand and Permission." *Lingua* 56: 5-92.

(ながとも・しゅんいちろう 博士課程後期在籍)